今週の倫理

2024.4.6〜4.12

4月のテーマ ｜ 肯定的思考

1380号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）の言葉を掲載いたします。

大肯定の姿勢

丸山竹秋

悪は一般に肯定できないものとしてあつかわれている。悪者は社会から排撃され、制裁をうける。法を犯す者はそれ相応の罰をうけるのである。法にはふれないけれども、明らかに悪をおこなって人を苦しめるとか、知能犯といったような巧みな行動によって人を不幸に落としいれるとかする者にたいしては、嫌悪や憎悪を抱き、そうした行為を排除しようとする。これらは悪の否定というべきであろう。

しかしながら、このような見方を超えて、いかなる悪をも肯定する立場がある。それはすべての現象を肯定するもので絶対肯定、あるいは大肯定の立場といえる。

地球が誕生して今日までに四十五億年とか四十八億年が経過したといわれるが、それには物理的理由があって、熱球であっても、氷に覆われていても、原因があってそのようになったのである。寒波の襲来が不完全で、熱風の拡大が完全であるとか、平静が善で、動乱が悪であるとか、そうした区別は人間の主観が勝手にきめるだけのことに過ぎず、すべてはそうなるようになって、そうなっているのであるから、それをそのまま肯定する。

善とか悪とか、一般でいうようなものを超えて、まずすべてを肯定し、受容する。これを大肯定というのである。

この立場に立てば、自然界のことにかぎらず、人間界のこともすべて肯定する。肯定するとは、それを「よし」と受けることである。この「よし」は道徳的価値判断でも、経済的価値判断でもない。存在し、生起するすべての現象にたいしてあるがままに見る、聞く、感じるということである。したがって悪いことをしている人も、それをそのままに見る。善いことをしている人も、それをそのままに見る。これは他人に対してのことだけではなく、自分自身のことについても同様である。病気、事故、その他苦難などにたいしても、それをそのままに見る、受ける。在るべくして在り、成るべくして成っている自分の状態にたいして、それらをすべて肯定するのである。

すべてを受け入れる大肯定の心境は至人の心であり、至境である。最高最上の心境ということができる。この大肯定は、すべての人が、同時に、一度になれるとは限らないが、かならずしも難行苦行を経なければならないというわけのものでもなく、そのように思えばそれでよいし、そうなれるのである。すべてを受け入れる大肯定がもっとも純粋であり絶対境であることを示す。

誰でもそうなれる可能性はあり、それにはいわゆる難行苦行を要するものとは限らないけれども、安易に、いい加減になれるものではない。ましてやこの大肯定を常時なし続けてゆくことはなかなかむつかしいのが普通であろう。

（『こうすれば人類は救われる』より）

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局